

### 39 子宮体癌における内膜増殖症と各種予後因子の相関

北里大

大河原聡, 上坊敏子, 蔵本博行, 土屋元一,  
角田新平, 中原優人, 新井正夫

〔目的〕子宮体癌の予後因子として組織学的分化度・筋層浸潤, 臨床進行期などが指摘されている。一方, 体癌には内膜増殖症を合併するものと, しないものがある。そこで, 内膜増殖症の合併が体癌の予後を予測する有用な指標となり得るか否か, 及び *natural history* の未だ明らかにされていない体癌の発生機序との関りを検討することを目的とした。〔方法〕子宮体癌の摘出標本において, 良性または異型増殖症の合併のあるものを group 1 (60例), 増殖症の合併はないが正常内膜組織のみられるものを group 2 (47例) の2つに分類し, 子宮体癌の各種予後因子及び臨床病理学的特徴との相関について検討した。〔成績〕予後良好因子である G1 及び *adenoacanthoma* は group 1 では 48.3%, group 2 では 22.5%, 筋層浸潤 $\frac{1}{3}$ 未満は, group 1 では 76.6%, group 2 では 48.9%, 臨床進行期 I 期は group 1 では 50.0%, group 2 では 29.8% であった。臨床病理学的には, 50歳未満の症例は group 1 の 46.7% に対し, group 2 では 6.4% と低い傾向にあり, 月経周期不整例は, group 1 では 46.2%, group 2 では 13.0%, また体癌組織中の ER, PR が共に陽性の症例は, group 1 では 72.0%, group 2 では 36.8% であった。〔結論〕group 1 と group 2 との比較では, 予後因子との関連から, 前者の方が予後良好と予想され, 予後の指示の1つとなり得ると考えられた。また, 臨床病理学的特徴より体癌には発生過程の異なる2つのタイプのあることが示唆された。

### 40 子宮内膜増殖症と初期体癌に関する細胞診断学的検討

弘前大

中野陽生, 松本 貴, 福士 明, 佐藤重美,  
斎藤良治

〔目的〕子宮内膜増殖症は子宮体部のいわゆる前癌病変として取り扱われているが, その病理学的位置などから細胞診断上, 正常内膜や高分化型腺癌との鑑別が困難な要素を多く含んでいる。今回私たちはこれら細胞診断上の問題点について検討した。〔方法〕最近5年間に当大学産科婦人科およびその関連病院で取り扱った子宮内膜増殖症38例と筋層浸潤 $\frac{1}{3}$ 未満の子宮体癌21例について, その細胞標本を再検討し, 異型細胞の出現形態, 細胞集団の重積性, 標本背景, 核形・大きさ, 核クロマチンの形態, 核小体などについて検討した。なお細胞採取法は癌研式吸引法が殆どであった。

〔成績〕(1)子宮内膜増殖症38例の内訳は嚢胞性8例, 腺腫性17例, 異型13例で, 子宮体癌21例の内訳は筋層浸潤のないものが2例, 筋層浸潤 $\frac{1}{3}$ 未満のものが19例で, 組織型では分化型13例, 中等度型4例, 未分化型4例であった。(2)異型細胞の出現率は子宮内膜増殖症全体では 47.4% (18/38) で, 嚢胞性 12.4% (1/8), 腺腫性 44.4%

(8/17), 異型 69.2% (9/13) であった。体癌では 100% (21/21) であった。(3)形態学的所見では嚢胞性はやや細胞重積性を認めるものの良性変化との鑑別は困難であった。腺腫性では個々の細胞異型は殆ど見られなかったが, 細胞集団としての異型性として捕えることができた。異型増殖症では重積性ととも細胞異型が認められた。しかし癌に見られる細胞の散在傾向や強い核異型, 肥大した核小体などはなく比較的揃っており, この点で癌との鑑別が可能と思われた。〔結論〕子宮内膜増殖症を細胞診で捕えるためには, 細胞重積性をいかに捕えるかが重要であると思われた。